

S. T. 英語英文学科・4 年次生

I. 留学レポート

① 協定留学を目指した理由

大学入学当初から、いつか留学に挑戦したいという気持ちは持っていました。しかし、実際に調べ始めると、学費や渡航費、生活費など想像以上に費用がかかることが分かり、当初は現実的に難しいと感じて一度は諦めかけました。それでも、アルバイトを通して少しずつ費用を貯められるようになったことに加え、「学生時代にしかできない経験を逃したくない」「挑戦しないまま後悔したくない」という思いが次第に強くなり、改めて留学を目指すことを決めました。本格的に検討を始めたのは、3 回生の春学期頃です。数ある留学制度の中でも協定留学を選んだ理由は主に 2 点あります。第一に、協定留学では同志社女子大学の学費を支払う形で留学先大学の授業を受講でき、他の制度と比較して費用面で現実的だと判断したためです。第二に、いわゆる語学留学のように語学学習に特化するだけでなく、現地学生と同じ授業を履修することで、より厳しい環境に身を置きながら語学力の向上を図れると考えました。加えて、現地ならではの科目を通して、語学力に加え、思考力や想像力、新しい教養を身につけられる点にも魅力を感じました。

② 留学を目指してから出願までの語学学習方法

出願に向けては、IELTS のスコア取得を目標に学習を進めました。就職活動と並行していたため、限られた時間の中で効率よく取り組む必要があり、短期集中で計画的に学習しました。使用した教材は、旺文社の IELTS 向け単語帳、同じく旺文社の Listening・Writing 対策の参考書、そしてケンブリッジの公式問題集です。まずは単語暗記と並行して Listening・Writing の参考書に取り組み、問題の傾向を掴みながら、自分の得意・不得意や現在のレベルを把握しました。その後はケンブリッジの公式問題集を繰り返し解き、時間配分も含めた本番形式への慣れを重視しました。特に、解きっぱなしにせず、間違えた問題の原因（語彙不足、設問理解、時間不足など）を整理し、次回の演習で同じ失敗をしないことを意識しました。

③ 留学決定から出発までの準備期間にしたこと

◆ 語学学習法

留学決定後も、IELTS 学習で使用していた旺文社の参考書や公式問題集を継続して活用しました。他にも、特に Listening と Speaking に不安があったため、英会話アプリ（speak）や NHK ラジオ英会話などを取り入れ、日常的に英語を「聞く・話す」機会を増やすようにしました。

◆ ビザ申請方法

ビザ申請については、国際課の方の勧めもあり、申請をサポートしていただける JACC 渡航センターを利用しました。手続き面で不安が大きかった時期でしたが、迅速かつ適切に対応していただいたおかげで無事にビザを取得でき、とても心強かったです。費用はかかりましたが、結果的には利用して良かったと感じています。一方で、自力で申請している方も多くいました。私の場合は就職活動と準備を並行しており、十分な時間を確保しにくかったことや、手続きの複雑さに不安があったため、サポート機関の利用が自分に合っていたと思います。時間が限られている人や、手続きが苦手な人、制度変更などが起こりやすい時期には、専門機関の活用も有効な選択肢だと考えます。

◆ その他

渡航前に求められる予防接種が多く、接種間隔の都合上、準備には一定の期間が必要でした。また医師の署名が必要な書類もあり、確認事項が細かったため、早い段階でスケジュールを立てておくことが大切だと感じました。

④ 現地到着後

◆ 空港から滞在先までの移動手段、所要時間

大学のサポーターの方が空港まで迎えに来てくださり、大学まで送って下さいました。大学までは車で約1時間程度でした。

◆ 現地でのオリエンテーション期間中にしたこと

オリエンテーション期間中は、キャンパス案内やレクリエーションへの参加に加え、MBU の生活全般に関する説明を受けました。

◆ その他必要な諸手続き方法

寮費・食費の支払いが必要で、送金、クレジットカード、口座振込みの3つの方法が提示されました。ただし、送金やクレジットカードは審査等の理由で通りにくい場合があります、複数の方法を試す必要がありました。また、請求書については、学費が含まれているように表示されていたり、部屋タイプに応じた金額が異なるのに誤った金額が表示されていたりするなど、内容に不備が見られる場合があります。そのため、請求内容はよく確認し、不明点は早めに問い合わせることが大切だと感じました。一方で、メールの返信が得られない場合や、ファイナンシャルオフィスに行ってもすぐに対応してもらえない場合もあり、余裕をもった準備と、粘り強く問い合わせる姿勢が必要だと実感しました。

⑤ 語学研修期間

語学研修期間なし

⑥ 正規科目履修期間

◆ 大学の施設・環境について

大学は静かな田舎町にある、比較的こじんまりした環境でした。木々が多く、リスなどの動物も見られる自然豊かな場所で、落ち着いた雰囲気の中で過ごすことができました。その一方で、交通の便はあまり良いとは言えず、事前の下調べは必須でした。さらに、調べていても運行ダイヤが変更・キャンセルされることがあり、常に最新情報を確認する必要がありました。気候は日本より乾燥しており、体感としては比較的涼しく感じました。冬は非常に寒く、雪が積もることも多かったです。また文化の違いとして、夏でも冷房が強く効いている場所が多く、教室や図書館で寒さを感じることがありました。そのため、長袖や羽織れるものを多めに持っていくことを勧めます。Wi-Fi 環境については、日によっては全く繋がらないこともあり、安定しているとは言えませんでした。大学・寮ともに Wi-Fi 完備と聞いていたため、私は 10GB の SIM を契約していましたが、2 週間ほどでデータ容量が不足し、課題提出や旅行時に困る場面がありました。留学時期や年度によって状況は変わる可能性があります。通信面の不安を減らすため、可能であれば無制限プランを選択しておくと思えます。学内施設としては、図書館が夜遅くまで開いており、自主学習に活用できました。また、誰でも利用できる「ラベンダーラウンジ」というスペースがあり、誕生日パーティーやムービーナイト等のイベントを通して、現地学生と映画を見たり、ゲーム・カラオケをしたり、お菓子を食べながら交流する機会を持つことができました。授業外でも自然に人と関われる場があったことは、留学生生活をより充実させる要因の一つだったと感じます。

◆ 履修科目について

・ BUAD 200 MANAGEMENT PRINCIPLES

マネジメントの基本概念を P-O-L-C framework（Planning/Organizing/Leading/Controlling）に基づいて学びました。授業は講義形式に加え、毎回 4 人程度のグループでディスカッションを行い、学んだ内容を具体例に当てはめて考える機会が多くありました。課題としては、毎週末にオンラインの小テストが実施され、対策のために毎回 30 ページ弱の教科書を読む必要がありましたが、テスト中の教科書やインターネットの参照が認められていました。さらに、授業内容に関するライティング課題が 3 回あり、いずれも最大 5 枚程度と分量が多かったため、計画的に準備する必要がありました。プレゼンテーション課題は、企業のケースを扱うグループプレゼンテーション（約 7 分）が 1 回ありました。また、インタビュープロジェクトでは実際にマネジメント職に就いている方にインタビューを行い、最大 5 枚のレポート提出、または 5 分以上のプレゼンテーションのいずれかを選択できました。両方に取り組んだ場合は追加ポイントが得られる仕組みでした。最終評価としては、選択式とエッセイ式から成る Final Exam があり、どちらもオンライ

ンで実施されました。マネジメントを様々なテーマや実例から学べるだけでなく、教科書読解・レポート・ディスカッション・インタビューを通して、リーディング／ライティング／スピーキング力に加え、専門知識や思考力も鍛えられる授業でした。

・ **COMM 100 PUBLIC SPEAKING**

スピーチやプレゼンテーションを効果的に行うための技術を学び、実践することを目的とした授業でした。授業では、YouTube の解説動画や TED のスピーチを視聴し、構成の作り方、聴衆への伝え方、話し方の工夫などについて教授が詳しく解説してくださいました。理論を学んだうえで実際に発表を行う形式でした。授業内では、クラスメイトと教授の前で計 4 回スピーチ／プレゼンテーションを行いました。インタビューを含む課題もあり準備には時間がかかりましたが、テーマは過度に難しいものではなく、内容の自由度も高かったため、自分の関心に沿って取り組むことができました。また、評価基準が事前に明確に提示されるため、対策を立てやすく、努力が結果に反映されやすい授業だと感じました。私は人前で話すことが苦手当初は緊張していましたが、教授や学生が親切にサポートしてくれたことで、安心して挑戦できました。まとまった時間英語で話す経験だけでなく、現地学生のスピーチを聞き、表現や話し方を学べたことも非常に貴重でした。特に最終試験はありませんでした。

・ **HIST 111 US HISTORY TO 1877 (H) (NARR)**

アメリカ史の起源から 1877 年までの歴史を学びました。基本は講義形式で、教授がスライドを用いながら解説するスタイルでしたが、学生の発言も多く、授業全体がディスカッションのようになる場面もありました。評価要素の一つとしてクイズが 5 回実施され、ほとんどは選択式で、稀に短い記述問題も含まれていました。内容そのものは極端に難しいわけはありませんでしたが、私はもともとアメリカ史の知識が多くなく、人物名・地名などの固有名詞を覚えることが苦手だったため、学習にはかなりの時間を要しました。レポート課題は定期的にあり、主に Source Analysis と Critical Reflection の 2 種類でした。Source Analysis では一次資料を 2 種類読み、興味のある 1 つを選んで要約、含まれる偏見、印象に残った文章の引用などを、2 枚程度のテンプレートに沿ってまとめました。当時の文章を読むため英語表現が古く、歴史用語も多かったことから、内容理解に時間をかける必要がありました。Critical Reflection では二次資料を 2 種類程度読み、テーマに沿って 3 枚程度のレポートを書きました。文献によっては 20 ページ以上の読解が必要で、早めに取りかからないと間に合わない分量でした。Final Project として、対面の場合は 8 分、録音の場合は 10 分のプレゼンテーションと、5 枚以上のレポート提出が求められました。アメリカ史の学習だけでなく、圧倒的な量のリーディングとライティングを通して英語力を向上させられた授業でした。

・ **MBU 101 CREATIVITY & DESIGN NEIGHBORHOOD**

本授業は MBU の新入生向け科目で、履修担当者から強く勧められたため受講しました。教室に集まって授業を行う回は数回程度で、主に新入生向けのイベントやゲスト講義への参加が出席扱いとなり、参加を通して単位を取得する形式でした。授業時間外にも Signature Event と Neighborhood Event への参加が求められ、その都度、感想文を提出する必要がありました。一方で、現地の新入生を対象とするため、履修登録の方法や専攻の決め方、先輩や教授に進路相談をする回など、交換留学生には直接関係しにくい内容も多く含まれていました。そのため、交換留学生の中には途中で履修をやめる方も多かった印象です。

・ THEA 116 For All Season

まず「カノン (canon)」の定義と、どのような作品がカノンに含まれてきたのかを学びました。そのうえで、演劇をプロデュースする会社を立ち上げるという設定でグループを作り、各グループの価値観を反映させた演劇作品を 3 つ選定しました。授業では、各グループが選んだ演劇作品を毎週読んだうえで、登場人物の関係性、作品に含まれる価値観、歴史的背景、作品から何が学べるかなどについて、クラス全体で議論しました。毎回、授業内容の感想や要約をまとめるミニレポートの提出が求められます。さらに数回のレポート課題では、授業で学んだことを改めて再考し、自分の言葉でまとめ直すことが求められました。最終課題では、自分たちのチームが選んだ 3 作品が「カノン」の解釈をどのように広げ得るのか、そして観客・演者・制作チームにどのような価値観や影響を与えられるのかについて、グループでプレゼンテーションを行いました。読解と議論を繰り返しながら、作品を多角的に捉える視点を養うことができたと感じます。

⑦ クラブ、課外活動、ボランティア活動

特になし

⑧ 現地での住まいについて

◆ 正規科目履修期間

寮では、3 人部屋の相部屋で、ルームメイトは韓国人の学生 2 名でした。共同のトイレ・シャワー、ランドリールーム、キッチンがついています。食事については、交換留学生はミールプランのアルティメットプランを選ばなければならず、連休など学食が開いていない日は自炊や外食も取り入れました。キャンパス内にあるので、教室へのアクセスは良いです。

⑨ 長期休暇の過ごし方

私は 1 セメスターの留学であったため、長期休暇を現地で過ごすことはありませんでした。ただし、学期中の祝日であるサンクスギビング（約 4 日間）にはラスベガスへ旅行し、学期末にはニューヨークにも訪れました。短い期間ではありましたが、現地でできた友人との旅

行を通して、学外での文化体験や交流の時間を持つことができました。

⑩ 留学期間中の就職活動の取り組み

就職活動は留学前（帰国前）に終了していたため、留学期間中は学業と生活に集中して取り組むことができました。

Ⅱ. 留学の感想

① 留学中で楽しかったこと、最も思い出に残っていること

留学中に最も楽しかったのは、友人との日常生活です。一緒に食事をしたり、何気ない会話を楽しんだりした時間は、今振り返ってもかけがえのない思い出です。大学のスポーツチームの試合観戦や学内イベントへの参加も、現地学生と同じ時間を共有できる貴重な機会でした。さらに、韓国出身のルームメイト 2 人とも仲良くなり、文化の違いについて話すことも多くありました。違いを知るたびに新しい価値観を学べることが新鮮で、日々の会話を通してスピーキング力が伸びていく実感があつたのも嬉しかった点です。また、ホストファミリーとの交流も特に印象に残っています。夕食をごちそうしていただいたり、逆に日本食をふるまったり、ゲームをしたり、教会に行ったり、ハイキングに連れて行っていただいたり、さまざまな経験をさせてもらいました。とても親切で温かい家族であり、留学生活の中でも最高の思い出の一つになりました。授業面でも、日本とは異なる授業の雰囲気や課題の進め方が新鮮で、学ぶこと自体を楽しめました。大変な課題もありましたが、アメリカならではの資料を読み、「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」経験ができたことは大きな収穫でした。さらに、Las Posadas という自国の文化を紹介するイベントに参加したことも印象深い経験です。各国がブースを設け、10 分以内で約 50 名程度の参加者に向けて文化を感じられる企画を行うもので、交換留学生には参加が必須とされていました。私は創価大学から来ていた日本人交換留学生 1 名と協力し、日本舞踊を披露した後、参加者の名前を半紙に習字で書く企画を行いました。準備期間中はオフィスとのやり取りなどでトラブルも多く、負担が大きい場面もありましたが、当日は会場を盛り上げることができ、日本の文化を伝えられたことに達成感がありました。また、現地学生とより密に関わるきっかけにもなり、挑戦して良かったと感じています。

② 留学中でつらかったこと、最も苦勞したこと

最も苦勞したのは履修登録です。私は 4 回生であり、ゼミの単位認定が必要だったため、特に慎重に科目を選ぶ必要がありました。事前に調べていた授業が開講されていなかったり、初回授業を受けてみると想定していた内容と異なっていたりすることもあり、最終判断を下すまでに時間がかかりました。自分が納得できるまで悩みぬくことが大切だと思います。

また、予想していなかった点として、交換留学生同士の人間関係にも難しさがありました。部屋割りや先ほど述べた Las Posadas の準備など、協力が求められる場面で、コミュニケーションがうまく噛み合わないこともありました。国が近いアジア圏同士でも、あるいは日本人同士であっても、価値観は人それぞれであることを実感しました。加えて、覚悟はしていたものの、日本の大学に比べて課題量が多い点も大変でした。言語が異なる分、同じ課題でも現地学生以上に時間がかかり、授業の理解に加えて大量の英語を読んで書く必要がありました。ただ、その分追い込まれた環境の中で英語力が伸びた実感もありました。私は授業内容が新鮮で興味を持てるものが多かったため、苦勞しつつも前向きに取り組めたと思います。

③ 文化・習慣の違いなどで驚いたこと

特別に大きな違いを強く感じたわけではありませんが、日常の中で細かな違いは多くありました。特に印象的だったのは、知らない人からでも服装を褒められる機会が多かったことです。日々の何気ない声かけが温かく、素敵な文化だと感じました。また、留学生を個人的に気にかけてくれる学生が多く、さまざまな場面で助けられました。日本では、知らない留学生に話しかけることにハードルを感じる人も多いと思うため、その点は学ぶべき姿勢だと思いました。一方で、寮やキャンパスの清潔さ、学生のマナーについては、日本と比較してしまうと劣ってしまうと感じました。例えば夜中の騒音や、冷房が強すぎる環境などは、人によってはストレスになる可能性があると思います。

Ⅲ. 留学希望者へのアドバイス

① 留学先大学の良かった点、悪かった点

自然が豊かで静かな場所に位置しており、落ち着いた環境で勉強に集中しやすい点が良かったです。英語力を伸ばしたい人や、学業に集中したい人にとっては特に適した環境だと思います。加えて小規模な大学であるため、教授や学生との距離が近く、質問や相談がしやすい点も魅力でした。留学生に対しても丁寧で親切に対応してくれ、課題に対するフィードバックも手厚い印象でした。一方で、交通の便は良いとは言えず、さまざまな場所に出かけた人には不便を感じる可能性があります。買い物や外食の際には車が必要な場面が多く、車を持っている友人に頼る必要がありました。バスは時間通りに来ないことも多く、運行していない日もあったため、移動計画には余裕が必要だと感じました。また、以前は交換留学生一人ひとりにサポーターがつく制度があったものの、現在はなくなったと聞きました。大きく困ることはありませんでしたが、もし制度があれば交流の輪が広がり、授業や生活の立ち上げがさらにスムーズになったかもしれません。

② 日本から持って行って、特に役に立ったもの

パソコンは使用しない日はないため、必ず持参すべきだと感じました。日本に比べて読む資料が多く、課題やテストもオンラインで行われることが多かったです。可能であればタブレットもあると便利だと思います。私はパソコンのみで対応しましたが、複数の資料を見ながらレポートを書く際に画面が足りず、頻繁に画面を切り替える必要がありました。交換留学生 5 名のうち、私以外は全員タブレットも持参していたため、作業効率の面で差を感じました。生活面では、サンダルや部屋用のスリッパが特に役立ちました。寮内は基本的に土足であり、靴を履き続けることが苦手だったため、室内用の履物があると快適でした。特にサンダルはシャワー後に靴下を履かずに済むため便利でした。また旅行用に使い捨てスリッパも持参しましたが、アメリカのホテルにはスリッパが置いていないことが多く、大活躍しました。また、私たちは事前に知らされていなかったため生活用品を現地で購入しましたが、実際には、以前の交換留学生がハンガー、ベッドシーツ、枕、洗濯カゴ、生理用品、衣類など、さまざまな物品を次の留学生に向けて寄付してくれていました。まずは寄付品を確認して活用すれば、費用を抑えられると思います。買い物に行く前に、寄付品の置き場所や利用方法を確認することを勧めます。また、アメリカ版 Amazon を利用すれば、必要な物を事前に大学宛に配送しておくこともできます。到着直後の買い出しの負担を減らせるため、渡航前に準備できる部分はオンラインを活用すると効率的だと思います。

③ 語学力の向上等、留学の成果、留学前と後で変わったこと

帰国後にまだ英語試験を受けていないため、スコアなどの具体的な数値で向上を示すことはできません。しかし、日常生活・授業・課題のすべてで英語を使う環境にいたことで、英語 4 技能が必然的に鍛えられた実感があります。特に、日常会話や授業の聞き取りは当初難しかったものの、帰国前には現地学生との会話を楽しめるようになり、授業でも教授の話の完璧にはないですが理解できるようになったと感じています。うまく言えない場面があっても諦めずに挑戦し続けること、目の前の課題に一つひとつ向き合うことが、結果的に成長につながったと思います。

④ これから留学をしようと思っている後輩へのアドバイス

留学は楽しいことばかりではなく、言語面や課題量、生活環境、人間関係など、想像以上に大変だと感じる場面もあるかもしれません。特に、同じことをするにも母語ではない分だけ時間がかかり、思うように伝えられずに悔しい思いをすることもありました。しかしその分、日常生活から授業、課題まで英語に囲まれた環境に身を置くことで、英語力だけでなく、困難な状況でも諦めずに工夫し続ける姿勢や、粘り強さといった精神面での成長も実感できました。うまくいかない時があっても、挑戦を続けるうちに少しずつできることが増え、自

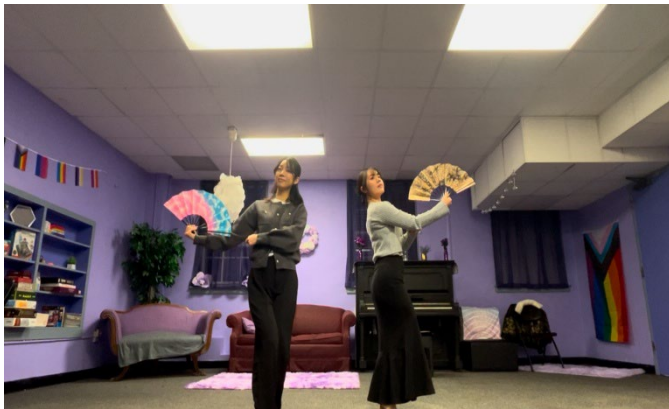
信につながっていきます。もし留学に行くか迷っているなら、準備を整えたうえでぜひ挑戦してほしいです。大変さ以上に得られる学びや出会いがあり、「行って良かった」と思える経験になると思います。

IV. 将来の目標

今後の進路、将来の目標・夢

私は今後、福祉用具の営業職として働く予定です。就職活動では、必ずしも英語を使うことを前提に進路を選んだわけではありません。しかし、今回の留学を通して英語で学び、英語で人と関わる経験を得たことで、将来的な選択肢が広がったと感じています。将来転職などを検討する可能性もゼロではなく、その際に英語が生かせる職種にも挑戦できるよう、学びを継続していきたいと考えています。

V. 写真



Las Posadas というイベントで、
日本舞踊を披露した際の写真です。



ホストファミリーの方々と交換留
学生との写真です。

2025 年度 (秋スタート・1 セメスター)
Mary Baldwin University



Pumpkin carving のイベントに参加したときの写真です。



Apple picking のイベントに参加したときの写真です。